

平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 教育プログラム及び審査結果の概要

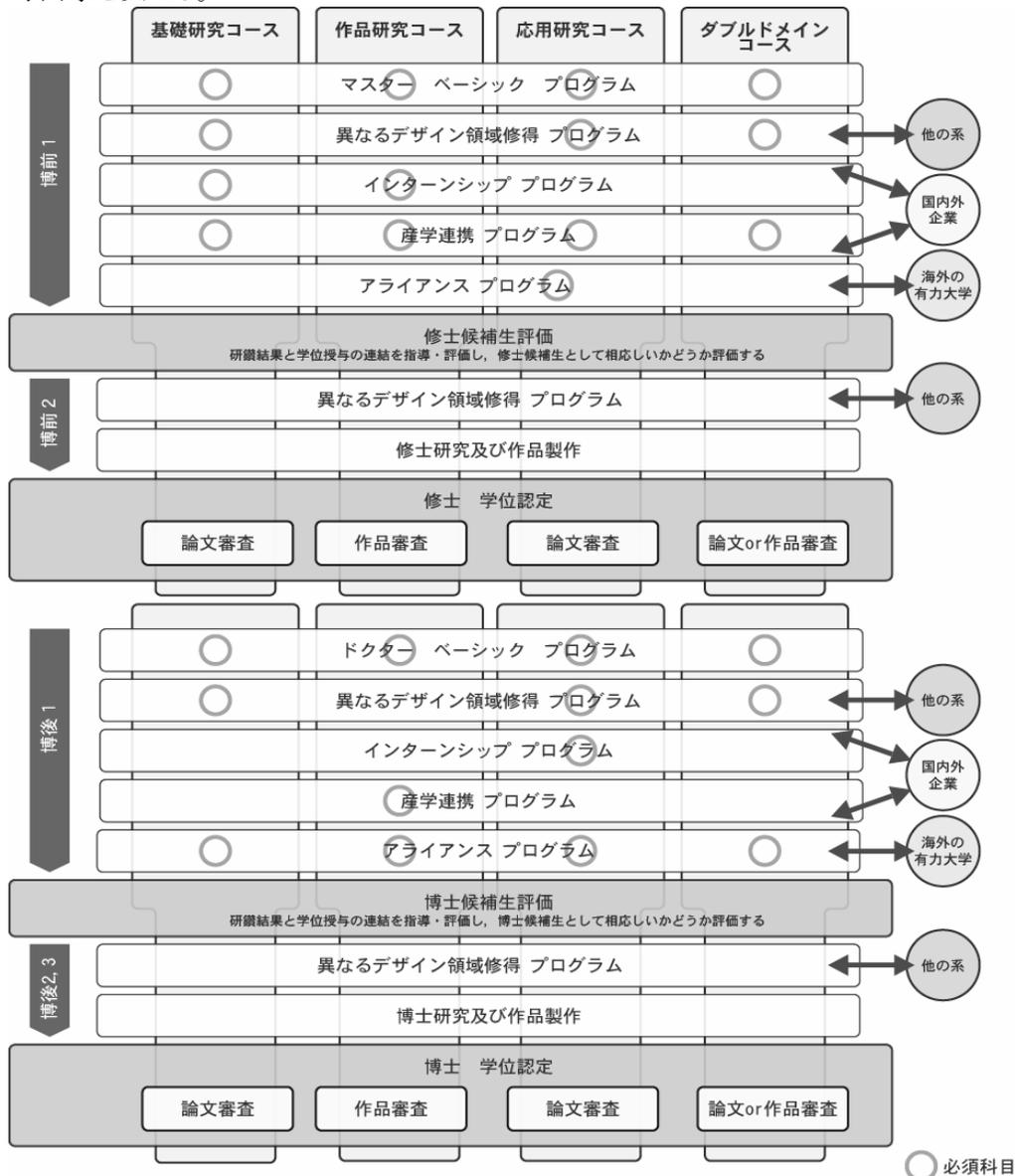
◇「1.申請分野(系)」～「6.履修プロセスの概念図」:大学からの計画調書(平成17年7月現在)を抜粋

機 関 名	千葉大学	整理番号	b006
1. 申請分野(系)	理工農系		
2. 教育プログラムの名称	高度デザイン研究者養成プログラム (クロスファーターライゼーションを促す教育)		
3. 関連研究分野(分科) (細目・キーワード)	主なものを左から順番に記入(3つ以内) 情報学、機械工学、生活科学		
	主なものを左から順番に記入(5つ以内) (感性デザイン、創造工学、生活造形)		
4. 研究科・専攻名 及び研究科長名 ([]書きで課程区分を記入、 複数の専攻で申請する場合は、 全ての研究科・専攻を記入)	(主たる研究科・専攻名) 自然科学研究科・デザイン専攻[博士前期課程] 自然科学研究科・人間環境デザイン科学専攻[博 士後期課程]	<u>研究科長(取組代表者)の氏名</u> 島倉 信	
	(その他関連する研究科・専攻名)		
5. 本事業の全体像			
5-(1) 本事業の大学全体としての位置付け(教育研究活動の充実を図るための支援・措置について)			
<p>本事業は自然科学研究科の人間環境デザイン科学専攻を構成する工業デザイン系が、都市計画・建築・園芸の他の構成メンバーとの連携のもとに、これまでに築いてきた産業界との太いパイプと海外の有力デザイン校との広いネットワークを駆使して、若手研究者に多様な研鑽の場を用意し、その結果を統合して研究に新たな視点をもたらす教育プログラムを開発・実施し、複雑・多様化した社会のニーズに応える若手デザイン研究者を育成しようとするものである。デザインに限らず、先端研究を行っている場では、如何に他分野の知識や考え方を上手に吸収・攪拌して高い創造性につなげるかが課題であり、工業デザインの領域ではそれが特に重要である。本事業ではこれを「<u>クロスファーターライゼーション(異花受粉)を促す教育</u>」として位置付け、同系がこれまで個別に提供してきた様々な研鑽場とそこでの成果を体系だった教育プログラムに構築し、大学院教育の実質化を企図したものである。工業デザイン系のこのような試みは人間環境デザイン科学専攻全体にとって重要であるばかりでなく、そのプログラムや成果は他の専攻に対しても波及効果が大きく、本学におけるモデルケースになりうると考えている。</p>			

機 関 名	千葉大学	整理番号	b006
<p>5-(2) これまでの教育研究活動の状況(現在まで行ってきた教育取組について)</p> <p>本専攻では、博士(工学, 理学, 学術)の3種を出し、その数はすでに130名を超え、大学のみならず企業などの研究機関で活躍する研究者を輩出している。社会の多様なニーズに応えるため、これまでも様々な取組を行っている。まず、デザイン・インターンシップ・プログラムを前期課程の授業科目として設け、多くの学生を企業のデザイン部門に派遣し教育実績をあげている。また、企業との共同研究として産学連携プロジェクトを実施し、実践的研究活動を通じての教育実績をあげてきた。さらに、湖南大学(中国)、精華大学美術学院(中国)、全北大学校(韓国)、韓国科学技術大学(韓国)、成功大学計画デザイン学部(台湾)、モナッシュ大学(オーストラリア)、アグアスカリエンテス自治大学デザイン(メキシコ)などの海外協定校を中心に、海外の大学とのジョイントセミナーの開催や、研究者・学生の交流を積極的に推進してきた。特に、精華大学とは昨年度よりProfessional Design Engineer Courseを試行的に実施して、高い評価を得ている。</p>			
<p>5-(3) 魅力ある大学院教育への取組・計画(大学院教育の実質化(教育の課程の組織的展開の強化)のための具体的な教育取組及び意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画について)</p> <p>今日デザインに求められる要求は、より高度化し、複雑化、多様化している。したがって、これに応え、中核となり得るデザイン研究者像も一様ではなく、社会のニーズに対応した多様で、高度なデザイン研究者の育成が必要である。そこで、本取組では、博士前期課程および博士後期課程において、都市計画、建築、園芸の3つのデザイン系との連携のもとに、養成する多様なデザイン研究者像に適したコース(教育)プログラムを開発・実践する。具体的には<u>基礎研究</u>、<u>作品研究</u>、<u>応用研究</u>、<u>ダブルドメイン</u>の各コースを設定し、それぞれに最も適した修了および修了までの要件を設け、多様なデザイン研究者を養成する。また、博士前期および後期課程のそれぞれ1年終了時に、研鑽結果と学位授与の連結を指導・評価し、修士候補生、博士候補生と認められた学生が次のプログラムに進むこととする。</p> <p>修了および修了までの要件としては以下の5項目を実施し、大学院教育の実質化を図る。</p> <p>①修了要件として作品を主とした論文の審査を加える、②異なるデザイン領域修得プログラム:他デザイン領域の演習授業の受講、③産学連携プロジェクトの遂行、④アライアンスプログラム:海外の大学での研修あるいは単位取得、⑤インターンシッププログラムの遂行</p> <p>こうした多様な研鑽の場を通して、学生あるいは若手研究者は、これまでの狭い領域に留まらず、クロスファータライズされ、研究における新たな視点の獲得が促される。また、若手研究者の流動性がさらに高まり、大学、産業界などの多様な場で次代をリードする研究者として活躍できるようになる。</p>			

6. 履修プロセスの概念図

- 1) 博士前・後期ともに、基礎研究、作品研究、応用研究、ダブルドメインの各コースに分ける。なお、ダブルドメインコースの学生は前3コースのいずれかに所属し、そのコース以外もしくは工業デザイン以外の領域のカリキュラムを修得する。
- 2) 各コースの学生は、1年次に、それぞれのコースのベーシックプログラムを受講する。
- 3) 上記の2)に加えて、①異なるデザイン領域修得プログラム、②産学連携プロジェクト、③アライアンスプログラム、④インターンシッププログラムの中から各コース必修のプログラムと選択プログラム一つを選び受講する。アライアンスプログラムを選択した学生のうち、成績優秀者には渡航費用を支援する。
- 4) 1年の終了時には、研鑽結果と学位授与の連結を指導・評価し、修士候補生あるいは博士候補生として認められた学生のみ次のプログラムに進む。審査は、企業の指導員や海外の大学教員を含む各プログラムの指導員の助言に基づいて、審査委員会にて行う。
- 5) 2年次(博士後期課程では2年次および3年次)では上記4プログラムのうち一つを選択し受講するとともに、修士ないしは博士の、論文の執筆あるいは作品を主とした論文の制作と執筆に従事する。
- 6) 修了の要件として従来からの論文に加え作品を主とした論文を含めるが、審査にあたっては、積極的に学外の専門家を交える。



機 関 名	千葉大学	整理番号	b006
<p data-bbox="165 199 588 232">< 審査結果の概要及び採択理由 ></p> <p data-bbox="165 295 1428 472">「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成に関する教育取組に対し重点的な支援を行うことにより、大学院教育の実質化（教育の課程の組織的な展開の強化）を推進することを目的としています。</p> <p data-bbox="189 490 491 521">本事業の趣旨に照らし、</p> <p data-bbox="189 535 1428 613">①大学院教育の実質化のための具体的な教育取組の方策が確立又は今後展開されることが期待できるものとなっているか</p> <p data-bbox="189 629 1225 663">②意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画となっているか</p> <p data-bbox="165 678 1428 855">の2つの視点に基づき審査を行った結果、当該教育プログラムに係る所見は、大学院教育の実質化のための各項目の方策が、優れており、期待できるとともに、教育プログラムが事業の趣旨に適合しており、その実現性、一定の成果と今後の展開の面も期待できると判断され、採択となりました。なお、特に優れた点、改善を要する点等については、以下の点があげられます。</p> <p data-bbox="177 918 633 949">〔特に優れた点、改善を要する点等〕</p> <ul data-bbox="170 965 1428 1238" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="170 965 1428 1093">・「高度デザイン研究者の養成」という専攻の目的・役割が明確に示されており、その実現のためのカリキュラムが、実践性を重視したコースワークの形で整備されており、日本に数少ない専攻の特色を生かした教育計画であると期待される。 <li data-bbox="170 1108 1428 1238">・ただし、作品を学位認定要件として認める際の作品評価の基準の策定や、また、教員任期制の導入、FD（教育内容・方法等の組織的な研究・研修）の具体的な実施体制の整備などの面で、今後、大学院教育の実質化に向けての更なる具体的な検討が必要である。 			